木野通信

Kyoto Seika University was founded in 1968. It started out with high ideals that broke the mold of old Japanese universities. Kyoto Seika University is the place where teachers, studentsand all others are respected as human beings, and where the spirit of freedom and autonomy prevail. Although it is a small university, it is known for producing graduates who are unique and independent. From now on, in order to improve and develop this university, we will continue to believe in these ideals. Kyoto Seika University consists of two faculties: Humanities and Art. The Faculty of Humanities uses educational philosophy of experiencial, intercultul, and interdisciplinary approach to study broadly various peoples and cultures. The main purpose is to gain a deep understanding of living people's socieliesand cultures as a whole. The faculty of Art not only teaches skills and teachniques but also cultivatesinsight into Humanity. While considering the basic question of what is Art to Humans, we search fortrue art expression. Kino Press is a newsletter published by Kyoto Seika University and distributed to students, factlty, administrators, graduates and other members of the university community. This publication is intended to keep readers informed of all aspects of K.S.U.'s development, including on campus event, personnel changes and student news.

KINO PRESS
KYOTO SEIKA UNIVERSITY
NO.27

木野通信 第27号 1997年7月10日発行
京都精華大学情報館文化情報課
〒606 京都市左京区岩倉木野町137
TEL 075-702-5343

大学の、ひとつの自己肯定のイメージ

—「愛だろっ、愛」のコマーシャルから—

学長
中尾ハジメ NAKAO Hajime

いまどきの世の中では、どんなに的確なスローガンの言葉でも、これだと思うような言葉でも、たちまちのうちに薄っぺらな消費主義的流行の言葉になっていってしまうかのようなことが、よくある。いいだす人間は、その言葉が人の心をとらえ、ひろくゆきわたるように、という気持ちだったのだから、薄くひきのばされてひろがっていくことを、覚悟しなければならない。そうでなければ、しゃべることさえできなくなってしまう。「共生」も、「癒し」も、どうやらこの運命をまぬがれることはできそうもない。

一方で、ずっと昔から使われている大切だったはずの言葉、いまでも大切な言葉が、なんだか力を失っているかのようなこともある。たとえば、「ともだち」とか「なかま」は、その言葉のさす関係がなくなってしまっては困る。だから、言葉としても、なくなってしまっては困るのだが、「ともだち」が「いじめ」の同義語になりそうな、曖昧な状況がはじまりつつあるのではないかとさえ思えてしまう。「ともだち」がもっぱら同質性と同調を意味するかのようでもあるのだ。

もっとも、こういった言語状況の描きかたが当たっているとしても、人間は人間でありつづけるので、絶望するほどのことはないと思ったほうがいい。とりあえずの対処方法のひとつは、共生であれ、癒しであれ、ともだちであれ、身をもって実現することだ。これらについては、たぶん、あまり高くて大きな看板はださずに、かぎりなく身の丈になり、そこに向かうということだろう。

それに、もうひとつのことも忘れずにつけくわえておきたい。共生も癒しも、ともだちも身の丈も、息苦しい理想になってしまっては、もとの木阿弥。私はなぜか、いささか唐突にあの、「愛だろっ、愛」という、なんかのアルコール飲料のコマーシャルを思いだしてしまうのだが、たとえばあの程度の体温と滑稽さの自己肯定をどこかに持ちあわせていなければ、因習主義にも、強迫的で病的な道徳主義にも、未来からの不安にも、抵抗できないのではないか。人間の発明した言葉は、もともと深刻さから軽薄さまでのスペクトルをはらむものだったということなのだ。言葉が、あるいは意味が、スペクトルのどこかに固定されなければならないとしたら、その瞬間、言葉の生命力のおおかたは失われてしまうのではないだろうか。大学が、学生たちと教職員にとって、生きるための場であり続けるのならば、そこでの言葉はさらに的確で、さらに柔軟でなければならない。そしてなによりも、ユーモアまでを含むその柔軟さは、自己肯定によるしかないように思われる。

simple life
93S010 北村貴史

NEWS

学生生活満足度調査を実施

**96年度に精華大に在学した全学生を対象に実態調査を実施。
初の本格的調査で、精華大生の生活や意識がはっきり浮かび上がってきた。**

調査の結果をまとめたパンフレット

■調査の概要

「セイカライフ満足度調査」と名づけられた学生生活に関する調査が行われたのは96年6月。大学院生・研究生などを除き、その時点で在学した全学生を対象とし、1,952名から回答を得た(回収率62.6％)。これほど本格的なものは本学でもはじめて。

調査はアンケート形式で行われ、アンケート項目は「精華大生の自己イメージ」から「教員・事務局・施設への満足度」まで70項目の多岐にわたる。

調査結果はパンフレットにまとめられて全学に公表された。

精華大生の生活や意識をデータで立体的に浮かび上がらせた興味深いものになっている。ここでその内容の一部を紹介しよう。

■精華はやはり個性的!?

在学生にとって精華とはどのような大学としてとらえられているのか。

調査の問63では「セイカの校風をどう思うか」質問している。

8項目への評価を問うものだが、「個性的」と答えた人がもっとも多く(79.1％)、「自由」(74.2％)「明るい」(68.4％)が続いている。逆に「まじめである」と思っている人が最も少ない。世評で語られてきたことが数字としても裏打ちされる結果となった。

こうした校風と自分との関係については、両学部とも7割近くが精華が自分に合っていると考えている。

「精華大生の描く精華大生像」という面白い項目もある。

9割近くが挙げた項目は「楽観的」。評価が高い項目をつなげていくと、「楽観的」で「自己主張が強く」「時間の観念がない」のが精華大生ということになる。

妙なこだわりなく自分をしっかり持っている学生像を抱いていることがわかる。

■満足度は6割

そもそも精華に入学した志望の強さはどうだったのか。

「絶対入りたかった」と「まあまあ満足して進学」あわせて約9割。ただし学部別では「絶対」が美術で6割を越えているのに対し人文は25％で、「まあまあ」の回答が多かった。

ではそれを前提に大学への満足度をみてみよう。

最も多いのは「やや満足している」で50.4％。「大変満足している」が11.1％で、あわせて6割以上が満足しているといえる。

授業内容全般への満足度は「大変満足」「やや満足」あわせて49.8％。学部間の差はあまりない。

■未来へ向けた活用を

ここに紹介したのは全調査のほんの一部だし、数字にもいろいろな読み方がある。今回の調査データを大学構成員各人がそれぞれによくふまえて、精華大学のよりよい未来の構築のステップとなることが期待される。

1996年度卒業式、1997年度入学式

たび立ちと出会い。京都精華大学の新しいページが今年もまた繰られた。

3月20日午前10時から体育館において、人文・美術両学部、大学院両研究科合同で1996年度卒業証書・学位記授与式が挙行された。美術学部では大学院生22名と学部生345名、人文学部では大学院生6名と学部生404名が卒業となった。

その後、恒例の卒業記念パーティーが悠々館で行われ、思い出や今後への期待を語らいながら名残り惜しい時をすごした。

一方、1997年度入学式は4月1日午前10時30分から、やはり両学部、大学院合同で体育館で行われた。美術学部では大学院生26名と学部生361名、人文学部では大学院生12名と学部生368名が新しく本学の一員となった。

吹奏楽部の祝奏の後、学長式辞、つづいて学生自治会長と教育後援会長から祝辞が述べられた。

例年は式が終了後、基本的にそのまま解散していたが、本年度は昼から悠々館を会場に新入生との懇親会がもたれた。最初は少し緊張している様子もうかがえたが、時間がたつにつれうちとけ、新入生と教職員・在学生が談笑し、親睦を深める姿が見られた。

地下鉄と本学結びスクールバスを運行

地下鉄とスクールバスで京都駅から40分。ますます便利になる精華大へのアクセス。

本学への交通アクセスについては、開学以来の課題であった。1989年に京阪電車の出町柳までの延長に合わせて、叡山電車に『京都精華大前』駅ができた。このことによって大阪からのアクセスが一本の線でつながることになった。しかし阪急・JRからの接続にはまだいささかの不便があった。

このたび、京都市地下鉄が宝が池の国際会館まで延長され、6月3日から開業した。これにともない本学では地下鉄『国際会館』駅から本学までの交通手段としてスクールバスを走らせることになった。

バスは三菱ローザデラックスで、乗車定員は29名。走行時間は約10分。基本的に1時間に3往復している。バスの運転等については外部への委託である。

運行は原則として授業期間および試験期間とし、日曜・祝日・大学休暇中は運休する。ただし運休期間中は、クラブ合宿・ゼミ旅行などに臨時でバスを利用することができる。

このスクールバスは本学学生のみならず、地元の方や本学にお越しの方にも広くご利用いただけるようになっている。

父母懇談会のお知らせ

昨年に引き続き、今年度も『父母懇談会』が開催される。

大学の紹介や学部の説明のほか、学生の修学状況についての個別相談もおこなわれる。

昨年は、福岡・広島・京都と西日本を中心に開催地が設定されたが、本年度は東日本を中心に、名古屋・東京・京都で開催すべく準備が進んでいる。

日時・場所は次の通り。

名古屋
7月12日(土)午後1時
名古屋都ホテル
東京
9月27日(土)午後1時
銀座文祥堂
京都
10月11日(土)午後1時
京都精華大学

昨年度の『父母懇談会』に参加された父母からは引き続き開催の要望が強くあり、教育後援会でも大学と共催ですすめていくことが決定された。

なお、この件については企画室(075-702-5201)まで。

EVENTS

1週間にわたってタイとの交流イベント

フィールドワーク参加の学生が中心となって「チェンマイウィーク」を開催。多彩な企画が展開された。

バンコクから北へ700km、タイ第2の都市チェンマイ。古くは13世紀の終わり、メンライ王によつて築かれたランナータイ王国の首都として栄え、旧市街には今もその当時の城壁や門が残る。

人文学部のタイ・フィールドワークはこのチェンマイをベースに行われた。参加学生が自分たちの驚きや喜びに満ちた体験をできるだけ多くの人に伝え、共有したいという思いが、「チェンマイウィーク」という企画になった。

「チェンマイウィーク」は4月14日から18日の1週間にわたって開催。初日は日本とタイを結ぶシンガーソングライター豊田勇造さんのコンサート。またこの日はおりしも水かけ祭として知られるタイ暦新年を祝うソンクラン祭の日でもあった。最後には水と白粉をかけあって大盛り上がりとなった。

16日は旅行ライターとして知られる前川健一さんの「旅をするロバ～旅は人間を鍛えるか」と題した講演会。豊富な体験を踏まえた話に聞きいった。

最終日18日は精華の学生とチェンマイ大学の学生混成でつくった舞踊団の北タイ伝統舞踊と音楽の夕べ。チェンマイ大学生はタイでも著名な舞踊家で、幻想的なダンスに観客は魅了された。一方精華大生も見事な楽器演奏やダンスを披露し、賛嘆の声がしきりにあがった。

また、1週間のうちにはタイ映画上映やフィールドワーク活動報告の写真展・ビデオ上映もあった。

タイ料理レストラン「イーサン」の出店も好評で、期間中毎日お昼をここでとった人も少なくなかったようだ。

日高六郎先生が学生にメッセージ

日高六郎先生が本学で特別講演。現代に生きる意味を、精華大生に語りかけた。

日高六郎先生は、76年から89年まで京都精華短大英語英文科教員として勤務された。一方、戦後一貫して〈人間の解放〉を追求し、〈民主主義〉の擁護に取り組んできた知識人として知られる。

本学が「ユニーク」と呼ばれる根拠のひとつに、教職員通じて年齢給で一本化している給与制度があるが、この給与検討委員会の委員長が日高先生だった。

日高先生が退職して8年目の今年6月16日、本学で「現代に生きる～若者へのメッセージ～」と題した特別講演会が開かれた。

80歳を迎えた日高先生が、個人史と戦後史を重ねあわせるかたちで振り返りながら、〈戦後民主主義〉の持つ意義と〈知識人〉の果たした役割を検証するもので、先生の記念碑的な講演会となった。

この講演はもちろん回顧にとどまるものではない。日高先生は未来へ架橋するために、学生たちへのメッセージとして問題意識を語った。

行動する知識人として戦後民主主義擁護の闘いを持続してきた日高先生が、"戦後思想の忘却と暗殺"(日高先生)の進行する現在において若者に語りかけたメッセージは、21世紀へ向けた新しい思想的潮流を探る試みとなった。

尚、この講演は後日NHKで放送される予定である。

マンガをテーマに『「知」の工房』開催。

のらくろからエヴァンゲリオンまで。マンガと時代の関係を徹底分析。

学内教員がホストとなり、学外からお招きしたゲスト講師との対談形式で行なう『「知」の工房』。今年度はマンガを取り上げた。総合テーマは「マンガと<現在>」。

現在の文化や社会には、マンガが大きな影響力を持っている。こうしたマンガと現在の関係を読み解こうというものだ。

前半2回を人文学部教員の斎藤光先生が担当。竹熊健太郎(編集家／ライター)さんを招いて、「マンガは世界を啓示するか」というテーマで語った。続いての「マンガは文化を表現するか」のゲストは夏目房之介(マンガ家／エッセイスト)さんだった。

後半はマンガ分野教員の牧野圭一先生にバトンタッチ。同じくマンガ分野のヨシトミヤスオ先生も加わって鼎談形式で進められた。「メディアとしてのマンガ」と題して、秋山孝(多摩美術大助教授)さん、「マンガとコミュニケーション」と題して、高月紘(京都大教授)さんと語った。

話は、のらくろからエヴァンゲリオン、コンピューターから環境問題まで多岐にわたって展開。毎回、終了予定時刻をオーバーする白熱した議論が繰り広げられた。

2,3月の寒い時期にもかかわらず多くの熱心なファンが大学まで足を運んだ。なかには、このためにわざわざ関東から足を運んだ方もあった。

マンガ専攻をもつ本学ならではの企画であり、また今後への期待の大きさが感じられた。

建築分野10年の集大成が1冊に

美術学部に建築分野が誕生して10年が経った。建築分野の独創的で実験的な教育システムとそれを支える理念を紹介し、この10年間の軌跡を記した本が出版された。

建築分野が創設から10年目を迎えたことを機に、その軌跡を本にまとめた『建築家の学校』と題されたもので、住まいの図書館出版季から発行されている(発売／星雲社。2,350円)。

本書を読むと、本学の建築分野が既成の大学の建築教育への批判の中から生まれ、様々に画期的で実験的な方法を大胆に取り入れていることがわかる。

その代表的なものがスクール制である。学生は3,4年になると教員がマスター(親方)をつとめるスクール(当初はユニット)に分属する。そこでは一人の教員による個性教育・個性研究が行われる。

一方、スクール・マスターの個性や方法論の違いを超えて教育結果を評価するために、外部の建築家がレフェリーを行なうオープンジュリーと呼ばれる公開審査を実施しているのも大きな特色である。

すでに退職された方も含めてマスターからの各スクールの実践報告も大きな部分を占めている。

上田篤先生はこう述べている。「この10年をふりかえってみて、いったい、わたしたちはなにをしたのだろうか。胸に手をあててかんがえてみると、それはようするに、自由で競争的な教育と、それに加えるに公正な評価をめざしたものでなかったか、とおもう。」

本書はこのような精華大建築分野の独創的なシステムとその理念を紹介し、この10年間の歴史を素描している。

またそれば かりでなく、大学論や教育論としても興味深く読める、幅の広い一冊である。

いよいよオープン!

新情報館完全ガイド

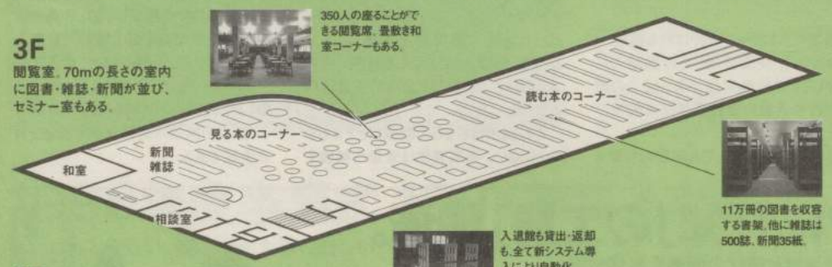
待望の新図書情報館が「情報館」としてついに完成。いよいよ9月に開館を迎える。
施設ばかりでなく内容も新たに生まれ変わった「情報館」のすべてを完全紹介する。

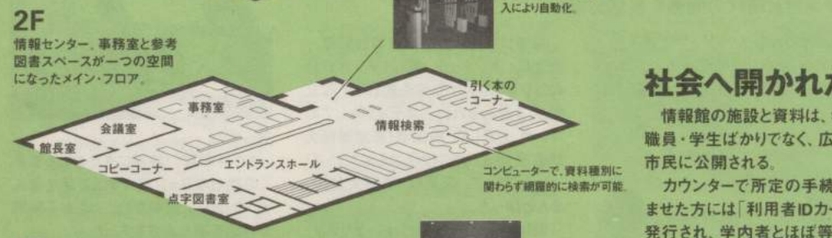
新しい建物は最新の設備と機材をそなえる、マルチ・メディア時代に対応した総合情報施設。

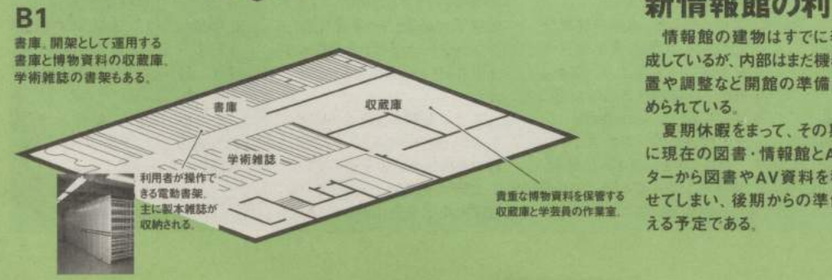
第2期施設整備計画の最後の建築物となる情報館は、地上3階、地下1階、延床面積4,746m²という大規模なもの。

いわゆる図書館に加えて、AVセンターも統合される。また、パソコンルームや講演会にも使用できる大講義室などを備えた講義棟である黎明館との複合建築でもある。「情報性」「快適性」「娯楽性」を兼ね備えた建築となっている。

その規模、設備、システム――どれをとっても他大学に類例を見ない画期的な建物である。







社会へ開かれた情報館～利用の誘い～

情報館の施設と資料は、学内教職員・学生ばかりでなく、広く一般市民に公開される。

カウンターで所定の手続きを済ませた方には「利用者IDカード」が発行され、学内者とほぼ等しいサービスを受けることができる。図書館部門ではレファレンス、情報検索、所蔵資料の閲覧と複写のほか、禁帯出図書以外の貸出もできる。AVセンター部門においても、個人視聴用のブースが開放され、録音・映像資料やCD－ROMが視聴できる。

開館時間も夜間まで延長し、仕事をお持ちの方にも利用しやすくなっている。

卒業生や、在学生のご家族の方にも、ぜひご利用いただきたい。

新情報館の利用は9月16日から。

情報館の建物はすでに春に完成しているが、内部はまだ機器の設置や調整など開館の準備がすすめられている。

夏期休暇をまって、その期間中に現在の図書・情報館とAVセンターから図書やAV資料を移動させてしまい、後期からの準備に備える予定である。

9月11日に竣工式が行われ、はじめてその全容をみなさんにご覧いただくことになる。

正式開館は後期授業の開始日にあたる9月16日。この日から通常どおり利用できる。

また、情報館ではオープニングを記念したイベントもいくつか企画中である。

情報館は従来の図書館にとどまらない新しいコンセプトの総合情報センター

「情報館」は建物の名称であるとともに、多様な機能を有する組織の名称でもある。

情報館は「図書館部門」「AVセンター部門」「情報処理部門」「博物館部門」「研究所部門」「生涯教育部門」「出版部門」の7つの部門から構成される。この7部門が有機的に結合することによって、情報を、収集・保存・利用から生産・流通・消費にいたるまで総合的に扱うことが可能になった。

このことによって情報館は今後、大学が世界へ情報を発信していく拠点として、大学の新しい可能性を開拓していく。

一般にも公開される図書館部門

図書館は新しい建物に移って格段に機械化が進む。コンピューターによる検索は図書だけでなく、AV資料も博物資料も一元的に検索できる。またインターネットにも接続している。入退館がカード1枚で自動になり、カバンを持ち込むこともできる。貸出・返却も機械を使って自分で処理できるため、プライバシーも保護される。利便性は確実にアップしている。

運用上の新しい試みとしては、一般市民に施設を開放し、また資料を公開していく。現在予定されているような簡素な手続きで、これほど大胆に公開する例は他にない。

また平日の夜間や土曜の開館時間も延長される予定である。

多くのみなさんにご利用いただきたい。

情報センターのオープンカウンター

先端メディアの中核となるAVセンター部門

利用を待つAV資料個人視聴ブース

AVセンターは音声および映像資料を提供していが、時代性を配慮して「マルチメディアセンター」としての機能を視野に入れた機器構成と業務体制となっている。従来のビデオなどに加えてCD-ROMやインターネットのためのコンピューターも導入される。

鑑賞だけでなく制作にも力を注いでいるのが、かねてから本学の特長である。AV資料の編集を行うAV制作室、AV資料の撮影や録音を行うAVスタジオにも大きなスペースを割いている。

また50名収容のAVホールの他、小グループ用ホールもあり、集団での鑑賞や学外への催しにも利用できる。

AVセンターも図書館と同様、一般市民にもに公開され開館時間が延長される。

生涯学習部門で開かれた大学をつくる

文化や社会の状況が急速に変化する現在、学校教育終了後も社会や人間について学び続けたいという欲求が高まっている。また仕事以外にいかに生の充実を求めるかということもこの社会では大きな課題となっている。

本学でもこれまで「アセンブリアワー講演会」や「『知』の工房」など社会人に向けた講座を実施してきたが、このような社会的要請を受けて、より充実した多様なプログラムの提供に取組むこととした。

21世紀を展望して、社会人に学習の機会と場を提供していくことは、今後大学にとって主要な任務となっていくだろう。

またとかく社会と遊離しがちな大学をつねに社会にさらすという意味では、大学の内部に対しても活力を与えることとなるはずである。

情報化推進を担う情報処理部門

情報処理部門は図書館・AVセンターの管理運用システムを担当することはもとより、これまでいささか遅れている感のあった本学全体の情報環境整備に取り組むこととなる。

そのことで各種情報が有機的に統合され、研究・授業・事務等どの側面からも、全体的に情報資源が活用できるようになる。

すでに情報館との複合施設「黎明館」内に新パソコン教室を開設。情報処理関係の授業がスタートするとともに、学生にも開放され、活発に利用されている。

学内を結ぶキャンパス・ネットワーク・システムの構築も近い将来に完成する予定である。

知的活性化を図る研究所部門

研究所もこれまでその設置が待望されていたもののひとつである。

研究所は本学の特色を生かして、文化および芸術諸分野を中心にした既成の学問領域にとらわれない広い領域を対象とすることとなるだろう。

研究所の設置によって両学部の協力を実現し、また学外研究者との交流も活発になり、学生も刺激を受けることになる。このことにより大学全体の教育・研究活動の活性化と総合化をつくりあげることが期待される。

その研究成果はシンポジウムや論文集の刊行など広く社会に公表・還元される予定である。

旧図書館が博物館に生まれ変わる

これまで親しまれてきた明窓館の図書館部分は、この夏に図書が新情報館に引っ越した後改築され、博物館として利用される予定である。

この施設を運用するのが「博物館部門」である。

博物館は、本学の所蔵する資料を公開するなど展覧会を行うとともに、学生や教員の作品を展示するギャラリーの機能もあわせ持つことになる。

最終的には法的な資格である博物館相当施設として登録申請することを目指しているが、その準備段階として当面はギャラリーとして施設を活用していくことが計画されている。

社会へ発信する出版部門

従来から本学には研究出版委員会があったが、より社会へ発信する機能を高めるため、出版部門としてその位置づけを明確にした。

大学をとりまく状況をみるなかで、今後の出版部門には広い意味での広報的要素が要請される。それは直接的に大学の名前を売り込むことではなく、社会的に認知されるような普遍的な価値のある情報を大学の知的活動の内実として発信していくようなものとして求められている。

出版部門では研究出版委員会の成果を継承して、「紀要」と「木野評論」の刊行を担当する。これら従前からの出版物により広い読者を獲得することがまず課題となっている。

またネット上での電子出版などこれまでの枠組みをこえた新しい取組みが期待される。

O B 紹 介

イラストレーターとして活躍する
黒崎 玄さん

コミカルでちょっとブラックなイラストが、奥さん雑誌でうけてます。VCD専攻86年度生の黒崎玄さんにインタビュー！

1990年に卒業して東京に出てきて1年間デザイン会社に勤めてました。安易に絵描きになろうと思って辞めてしまったんですけれど、純粋な絵を描くだけで食べて行ける訳もなくブラブラしてました。そのころに同期の友人や先輩で東京に出てきておられる方々に「絵が描ける…」とバイトとしてイラストレーションの制作を依頼していただいたのが、この仕事をはじめるきっかけとなりました。

僕は雑誌の仕事が中心ですので、短い期間にたくさんのイラストを描かなければなりません。今現在月に約100点くらいのイラストを描いています。

今までの主な仕事は、広告では学研、ビクター、横浜ランドマークタワーとか。雑誌では、きれいになりたい、サンキュ！、おはよう奥さん、ESSEなどです。

仕事で使う画材はアナログ中心ですが、時代の流れか最近はデータで入稿するような仕事も増えつつあります。デジタルに関しては中途半端な世代ですので、覚えるのも、一苦労です。まだまだやりたいことや課題が山積みですね。

VCD専攻を選んだのは高校時代の友人がデザインを専攻していて（高校も美術高校でした）新しいことに挑戦しているように思えたので「大学に行くならデザインも楽しそうだな。」といった軽い気持ちで選びました。実際、東京へも「同期の友人達がみんな東京へ行くから・・・」といった、何だか不純な（？）理由で就職したように思います。

大学では軽音に所属して、たくさん遊んで、たくさん友達ができました。今の仕事でも大学時代の友人や先輩や精華大学出身の方々にいろいろととお世話になってます。

大学での生活と社会生活とでは、かなりギャップがありましたが、マイペースでいる事を大学で学んだように思います。

学生活動紹介……国際交流室支援スタッフ

国際交流室は、留学生の受入れからフィールドワーク、交換留学プログラムなど、本学の国際交流事業全般を担当している。

その国際交流室の事業を支え、留学生やグループ交換学生との交流の促進を行なっている学生グループがO. I. E（Office of International Education）スタッフである。

国際交流室が呼びかけて春に募集、今年は80名の登録があった。

活動は、本学留学生との研修旅行や新入生・卒業生歓送迎会への参加など年間通して多岐にわたる。

この5月のミシガン大学グループの受入れにあたっても、夕食づくりや市内観光、通訳などで活躍した。

また4月に開催したチェンマイウィークにも参加している。

初めのうちは語学ができないといって躊躇する人も少なくないが、実際に留学生や交換学生と行動を共にしだすと、いつのまにか身振り手振りでコミュニケーションがとれている。なかには、この体験がきっかけとなって留学を考えはじめたひともいる。

積極的に交流行事に参加してもらうことが、国際交流室にとっては最大のサポート。異文化理解の身近な入り口として、多くの学生に参加してもらいたい。

斎藤光ゼミ……ゼミ紹介

斎藤光ゼミ（3回生）は現在19名。「現代文化における性の意味」をテーマにしています。たいていディスカッション形式で進めています。今日はゼミ生のQさんにお話を伺ってみたいと思います。

―今までのゼミではどんなことをしてきましたか。

Q：テキストとしては『<性>のミステリー』（伏見憲明）を初めにやりましたね。浅く広くセクシュアリティーに関することを一通りやったって感じかなあ。全部知ってたからおもしろくなかったていうひともいた。その後は「戦後買売春の歴史」（山下悦子）を読み、今後は別の視点からもみてみようということで、「売春のどこが悪い」（橋爪大三郎）、「愛と性の二段階革命」（瀬地山角）を読むことになっている。

―ところで、斎藤さんの印象はどうですか。「先生」ではなく、意見を言うひとりとして参加したいとおっしゃってましたが。

Q：でも、教師と生徒という関係はなかなか抜けきれない。あ。あと、瞳孔がいつも開いている感じがする。

―それでは、Qさんが最近、興味のあることは何ですか。

Q：あえぎ声かな。性別比較や国際比較をやってみたい。このゼミにいる他の学生のテーマとしては、性教育、フェティシズム、援助交際、ルックスとセックス、おじさん、アダルトビデオ、国によるセックス観の違い、AIDS、都市と性の関わり、などなど…。

―Qさん今日はありがとうございました。

（人文3年　次田史季）

New Comer 新人からの一言

春が来てまた新しいメンバーが加わった。4名の新人からあいさつの言葉を寄せてもらった。

澤田昌人
人文学部教員

専門分野は人類学。「文化人類学」「人文学演習」「人文学基礎」「人文学への視点」などの科目を担当している。

山口大学教育学部で5年半を過ごし、この大学に勤めることになりました。

アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民や農耕民の世界観、宗教を研究しています。4月から授業をやってみて実感したのは、精華大学は小さな大学のせいか教員と学生の心理的な距離が狭いようで、積極的に質問する学生がいるということです。楽しいことであると感謝してます。

山田國廣
人文学部教員

専門分野は環境論。「生活環境論」「地域環境論」「人文学への視点」「人文学演習」などの科目を担当している。

自由な校風と一見奔放な学生気質に少しは慣れてきました。全体として、学生生活を楽しんでいる様子がうかがえいい雰囲気です。自由であることは学生にとって居心地のよい環境であるとともに、社会の荒波に出ていくときに厳しい側面があります。この両面をどのように調整していくのかは、学生だけではなく教職員にとって最大の課題だとおもっています。

中島聡子
入試広報課

大学卒業後、上海に留学。中国語を学ぶ。帰国後は福祉事務所で、中国残留孤児の帰国者の通訳にあたっていた。

4月に京都精華大学に来て感じた事は、誰もがとても親切だということでした。私のどんな無知な質問にも、皆さん快く答えて下さいます。

親切にされると、幸せな気持ちになります。そういった全てをいつまでも失わず、今度は受験生や学生に同じ気持ちを伝えていけるようがんばりたいと思います。

宜しくお願い致します。

松井　雅
入試広報課

本学人文学部の卒業生。在学中はタイ・フィールドワークに参加した。卒業後は専門学校で広報・学生募集を担当していた。

青空の下、胸を張って歩くのって気持ちいいですよね。動物たちの息づかいや、季節の移り変わりも肌で感じることができます。

セイカの森には、いろんなことを忘れて、自分を見つめ直せる不思議な空気があるんじゃないでしょうか。

あせらずに、おごらずに。大学が元気に鼓動し続けられるよう、自分なりに脈を打ってゆければと思っています。

Human Affairs 新学長誕生、人事体制も固まる

新学長に中尾ハジメ先生が就任。新年度の体制も固まった。

斎藤博先生が健康上の理由から学長を退任したのを受け、学長選挙が実施された。

本学では全教職員に選挙権と被選挙権があり、また学生も信任投票という形で学長選出に関わる仕組みになっている。

今回は、まず全教職員による学長候補者選出選挙が4月17日に行われた。

次に、そこで選出された3名の候補者に対する学生の信任投票を5月6～8日に実施。そしてもう一度5月20日の全教職員の投票による本選挙が行われ、候補者の中から新学長が選出された。

5月25日付で新しく学長に就任することになったのは、人文学部教員の中尾ハジメ先生。

中尾先生は1975年に京都精華短期大学英語英文科の教員となった。その後、英語英文科主任、教務部長、広報部長、理事などの役職を歴任している。専門分野は社会心理学で、「社会意識調査法」「人文学演習」などの科目を担当している。

現在51歳の中尾先生は学長としてはあまり例のない若さ。戦後生まれの学長は全国でも数例しかなく、京都滋賀地域では初めてのことであると、新聞などでも大きな注目を集めることとなった。

新学長が就任し、また新しい年度を迎えたことで役員の交替があった。

学校法人木野学園京都精華大学の新しい役員などは下記の通りとなっている。

理事長　笠原芳光
学長（新任）　中尾ハジメ
専務理事　杉本修一
常務理事　景山喜巳
常務理事　松谷昌順
常務理事（新任）　中平佳男
理事　駒井四郎
理事　笹田友三郎
理事　川島春雄
理事　黒瀬哲一郎
監事　園部望
監事　田中久雄
監事（新任）　崎間昌一郎

教学担当学長補佐（新任）
松谷昌順
学生担当学長補佐（新任）
中平佳男
美術研究科長　吉富康夫
人文学研究科長（新任）　堤邦彦
美術学部長　小林陸一郎
人文学部長（新任）　大沢真一郎
大学事務局長（兼）就職部長　松浦逸郎
教務部長　栗巣満
学生部長（新任）　坪内成晃
広報部長（新任）　斎藤光
国際交流室長（新任）　新井清一
情報館長（新任）　牧野圭一
法人本部長　杉本修一
総務部長　景山喜巳
企画室長　吉村守

中尾学長の就任を報じる新聞記事

追悼の言葉

短大の設立準備委員会からのメンバーで常に大学を先頭で牽引してきた事務局の田所伴樹さん。人文学部の初代学部長として多くの課題を克服し現在の礎を築いた矢ヶ崎庄司先生。本学の歴史において重要な役割を果たしたおふたりの方がお亡くなりになりました。故人を偲ぶ文章を寄せていただきました。謹んで哀悼の意を表します。

同志・田所伴樹君の死を悼む

藤井義昭　（事務局）

「むくつけき旅の衣をぬぎすてて今日ふるさとへ帰るうれしさ」。

かって、精華の事務局でともに怒り、且つ汗・涙した、故・安達恒明君が39才の若さで急逝した時、あなたが万感の想いをこめて記し捧げた歌です。あれから十数年。まさか、そのあなたまでが、こんなに早く「旅の衣」を脱ぐことになろうとは。

一九六八年の京都精華短期大学開学より早く設立準備委員としてその前年から関わり、この大学と共に歩んだ30年。実質的な創立者であると同時に、終始、その中心に輝き続けた「精華の星」を失った痛手は私たちにとってあまりにも大きい。

私には、あなたのいない精華など考えられなかった。

おそらく、卒業生諸君の多くも、この気持ちは同じではないだろうか。

よりよき社会の実現のために、ともに、あくなき闘いを続けた同志社大学学生時代。理想を求めて身を粉にして働いた精華での若き時代。学園理事・事務局長の要職を背負いながらも、一方でラグビーその他を通して若い学生諸君の信望を一身に集めて、尚あまりある闘志を周囲に発散してきた田所伴樹。

あなたの存在が、学生・卒業生を始め精華に関わるすべてのひとびとに対して、どんなに勇気を与えてくれたか計り知れません。

私たちにとって「HARD」は必要だが「HEART」をも失ってはならないことを、あなたは身を以って示してくれていた。

そして晩年、自ら理事職を辞してから後も、体力・気力の限界まで精華を思い、学生を思い続けた入試広報課長時代。鬼気迫るものがあったその頃の無理・心労が、結局あなたの身体を蝕んでいったとしか思えません。

「若さとは人生のある時期のことではなく、心のありかたのことだ。若くあるためには、強い意思力と、優れた構想力と、激しい情熱が必要であり、小心さを圧倒する勇気と、易きにつこうとする心を叱咤する冒険への希求がなければならない。

人は歳月を重ねたから老いるのではない。理想を失うときに老いるのである。歳月は皮膚にしわを刻むが、情熱の消滅は魂にしわを刻む」

アメリカ人・サミュエル・ウルマンのこの詩を最後にあなたへ捧げて追悼の言葉としたい。

それは、自戒の念をこめた田所伴樹への鎮魂歌でもある。

長い間ご苦労さまでした。安らかな永久の眠りであらんことを。

矢ヶ崎さんの思い出

片桐ユズル　（人文学部教員）

矢ヶ崎庄司さんとはサンフランシスコで知りあった。1959年9月から～60年1月までフルブライト教員プログラムでわたしたちはサンフランシスコ州立大学にかよった。朝夕食つきのゲストハウスの2人部屋にわたしたちはくらした。

わたしは流行にうといから、ビート族というものがあるらしいと知ったのは現地についてしばらくしてからだった。その実態はぜんぜんわからないながらも、興奮してはなしあった。そうそう、わたしたちはすべてを英語でしゃべることにしていた。

ときどき最初の音が日本語が出かかったりすると、疲れているんだな、ということがわかった。そのうちシティ・ライツという本屋へいけばビートのことはすべてわかると聞いて、そこにいりびたようになった。そこで知りあったのはカウンターでアルバイトをしていたラッセル・ジョイナーで、彼はのちに一般意味論協会の事務局長になった。彼の訃報を、亡くなる直前の矢ヶ崎さんに伝えたかどうか、わたしは不確かである。もうひとりは書店の共同経営者のシグ・ムラオで、彼はいつも弱音をはいていたが、それの聞き手の矢ヶ崎さんのほうが先にいってしまった。日系アメリカ人に対する彼の共感はこのあたりからはじまっていたのだろうか。

彼は大学の卒論はエミリ・ディキンソンだったことや、お嬢さんは恵美里さんだということなどを知ったが、中山容という名前で詩を書くことはしばらく知らなかった。日本へかえってからいっしょにビート詩集を訳したり、意味論の研究会に出たりしていたが、やがてわたしは神戸に移った。するとまもなく66年に高石友也たちがあらわれ、フォークソング運動がはじまった。東京にいた中山容もすぐ乗ってディランの「ブレイボーイ、ブレイガール」をはじめつぎつぎに訳し、彼のまわりには真崎義博、中山ラビなどのシンガーソングライターが集まっていた。

そのように彼にはすばやいところがあった。わたしなどがキップの買い方がわからなくてモタモタしているうちに、彼はいつのまにか手にいれて向こう側に行ってしまっている。

亡くなる4日前にお見舞いに行くと「また来てね」と彼はいった。次の日は元気が半分くらいになっていて「もうだめみたい」といった。そのつぎの日は元気が四分の一になって「頭がぼけちゃった」といいながら、現代アメリカ詩と日系アメリカ文学関係の本を図書館でなんとかしてほしい、ということをいった。

1996年度決算及び1997年度予算報告

1996（平成8）年度資金収支計算書

1996（平成8）年4月1日から
1997（平成9）年3月31日まで　（単位：千円）

収入の部	
科目	金額
学生納付金収入	4,145,595
手数料収入	225,107
寄付金収入	36,428
補助金収入	259,579
資産運用収入	117,057
資産売却収入	2,445,986
事業収入	4,029
雑収入	26,880
借入金収入	1,040,000
前受金収入	1,087,128
その他の収入	653,037
資金収入調整勘定	△1,092,371
前年度繰越支払資金	2,591,227
収入の部合計	11,539,682
支出の部	
科目	金額
人件費支出	1,866,480
教育研究経費支出	548,738
管理経費支出	332,998
借入金等利息支出	149,481
借入金等返済支出	196,890
施設関係支出	1,434,572
設備関係支出	96,829
資産運用支出	3,513,031
その他の支出	107,546
資金支出調整勘定	△39,722
次年度繰越支払資金	3,332,839
支出の部合計	11,539,682

1996（平成8）年度消費収支計算書

1996（平成8）年4月1日から
1997（平成9）年3月31日まで　（単位：千円）

消費収入の部	
科目	金額
学生納付金	4,145,595
手数料	225,107
寄付金	54,520
補助金	259,579
資産運用収入	117,057
資産売却差額	2,845
事業収入	4,029
雑収入	26,880
帰属収入合計	4,835,612
基本金組入額合計	△699,294
消費収入の部合計	4,136,318
消費支出の部	
科目	金額
人件費	1,886,176
教育研究経費	881,307
管理経費	342,317
借入金等利息	149,481
資産処分差額	10,555
徴収不能額	4,993
消費支出の部合計	3,274,829
当年度消費収入超過額	861,489
前年度繰越消費支出超過額	536,795
翌年度繰越消費収入超過額	324,694

1997（平成9）年度資金収支予算書

1997（平成9）年4月1日から
1998（平成10）年3月31日まで　（単位：千円）

収入の部	
科目	金額
学生納付金	4,204,927
手数料収入	212,000
寄付金収入	60,000
補助金収入	263,000
資産運用収入	99,000
資産売却収入	0
事業収入	1,000
雑収入	30,000
借入金収入	720,000
前受金収入	791,000
その他の収入	124,500
資金収入調整勘定	△1,137,128
前年度繰越支払資金	3,332,839
収入の部合計	8,701,138
支出の部	
科目	金額
人件費支出	1,965,134
教育研究経費支出	730,712
管理経費支出	372,747
借入金等利息支出	170,000
借入金等返済支出	451,280
施設関係支出	2,041,000
設備関係支出	656,900
資産運用支出	0
その他支出	111,000
予備費	50,000
資金支出調整勘定	△43,000
次年度繰越支払資金	2,195,365
支出の部合計	8,701,138

（概　要）

96年度の帰属収入は、約48億円でした。このうち学生納付金は86%を占めています。

この中から、施設整備総合計画第二期の最終工事となる「情報館」「黎明館」とその付帯工事の建設費を中心とした施設関係支出等約7億円を基本金に組入れました。

人件費その他の経常経費は約33億円となり、96年度の消費収支は約8億6千万円の収入超過とすることができました。しかしながら、前年度からの繰越支出超過が5億円以上あるため、97年度への繰越収入超過は3億円余となります。

97年度は、「情報館」他の完成によって施設関係支出が96年度より増加するため、収支は96年度末の累積収入超過3億円を超える支出超過となる見込です。今後も、教学と施設の充実に見合った財政の安定が継続した課題となります。

貸借対照表

1997（平成9）年3月31日現在　（単位：千円）

資産の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定資産	15,405,755	13,730,507	1,675,248
有形固定資産	13,178,237	11,981,563	1,196,674
土地	3,406,399	3,406,399	0
建物	6,130,790	6,292,245	△161,455
構築物	690,257	764,319	△74,062
教育研究用機器備品	709,809	714,942	△5,133
その他の機器備品	74,052	78,358	△4,306
図書	606,461	565,813	40,648
車両	714	635	79
建設仮勘定	1,559,755	158,852	1,400,903
その他の固定資産	2,227,518	1,748,944	478,574
電話加入権	2,398	2,022	376
有価証券	1,589,564	609,017	980,547
長期貸付金	317,534	317,212	322
退職給与引当特定資産	168,022	119,966	48,056
減価償却引当特定資産	0	550,727	△550,727
第3号基本金引当資産	150,000	150,000	0
流動資産	3,460,218	2,665,336	794,882
現金預金	3,332,839	2,591,227	741,612
未収入金	63,055	58,606	4,449
短期貸付金	718	1,153	△435
有価証券	41,287	0	41,287
保証金	35	2,035	△2,000
立替金	11,085	7,178	3,907
前払金	3,835	344	3,491
仮払金	7,364	4,793	2,571
資産の部合計	18,865,973	16,395,843	2,470,130

負債の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
固定負債	3,782,303	3,473,886	308,417
長期借入金	3,246,680	2,957,960	288,720
退職給与引当金	535,623	515,926	19,697
流動負債	1,996,087	1,395,157	600,930
短期借入金	751,280	196,890	554,390
未払金	39,377	45,600	△6,223
前受金	1,087,128	1,031,716	55,412
預り金	118,302	120,951	△2,649
負債の部合計	5,778,390	4,869,043	909,347
基本金の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
第1号基本金	12,376,889	11,690,595	686,294
第2号基本金	0	0	0
第3号基本金	150,000	150,000	0
第4号基本金	236,000	223,000	13,000
基本金の部合計	12,762,889	12,063,595	699,294
消費収支差額の部			
科目	本年度末	前年度末	増減
翌年度繰越消費収支差額	324,694	△536,795	861,489
消費支出差額の部合計	324,694	△536,795	861,489
科目	本年度末	前年度末	増減
負債の部、基本金の部及び消費収支差額の部合計	18,865,973	16,395,843	2,470,130

京都精華大学1998年度入試日程

人文学部

試験種別	出願期間	試験日	試験会場	発表	手続締切
自由選抜	10月1日（水）～10月13日（月）	10月31日（金）	本学	11月8日（土）	11月21日（金）
公募推薦	11月1日（土）～11月14日（金）	11月22日（土）	本学	12月1日（月）	12月19日（金）
一般Ⅰ期	1月12日（月）～1月27日（火）	2月11日（水）	本学 地方	2月19日（木）	3月5日（木）
一般Ⅱ期	2月16日（月）～2月27日（金）	3月9日（月）	本学	3月16日（月）	3月23日（月）

美術学部

試験種別	出願期間	試験日	試験会場	発表	手続締切
公募推薦	11月1日（土）～11月14日（金）	11月25日（火）	本学	12月3日（水）	12月19日（金）
一般Ⅰ期	1月8日（木）～1月22日（木）	2月4日（水）～2月6日（金）	本学	2月16日（月）	2月27日（金）
一般Ⅱ期	2月10日（火）～2月23日（月）	3月3日（火）～3月4日（水）	本学	3月11日（水）	3月23日（月）

※他に留学生、帰国生徒、社会人の特別枠入試があります。

願書請求は入試広報課まで　フリーダイヤル 0120-075017

木野通信第27号
1997年7月10日発行
京都精華大学
京都精華大学　情報館 文化情報課 〒606京都市左京区岩倉木野町137　TEL 075-702-5343